

掌友会古典セミナー 、『こうていだいけい黄帝内経』

2021年12月26日

日本内経医学会元会長 宮川 浩也

『内経』は、どのように「ツボ」を探していたのか。
圧痛、硬結、ほかには何を目安にさがしていたのか。

【学ぶ】

『論語』衛霊公篇

「子曰、吾嘗終日不食、終夜不寝、以思、無益。不如学也。」

(子曰く、吾れ嘗て終日食らわず、終夜寝ねず、以て思うも、益無し。学ぶに如かざるなり。)

先生が言われた。「私は、かつて、まる一日ごはんもたべず、徹夜もして、いろいろ考えてみたが、無益だった。学ぶにこしたことはない」と。

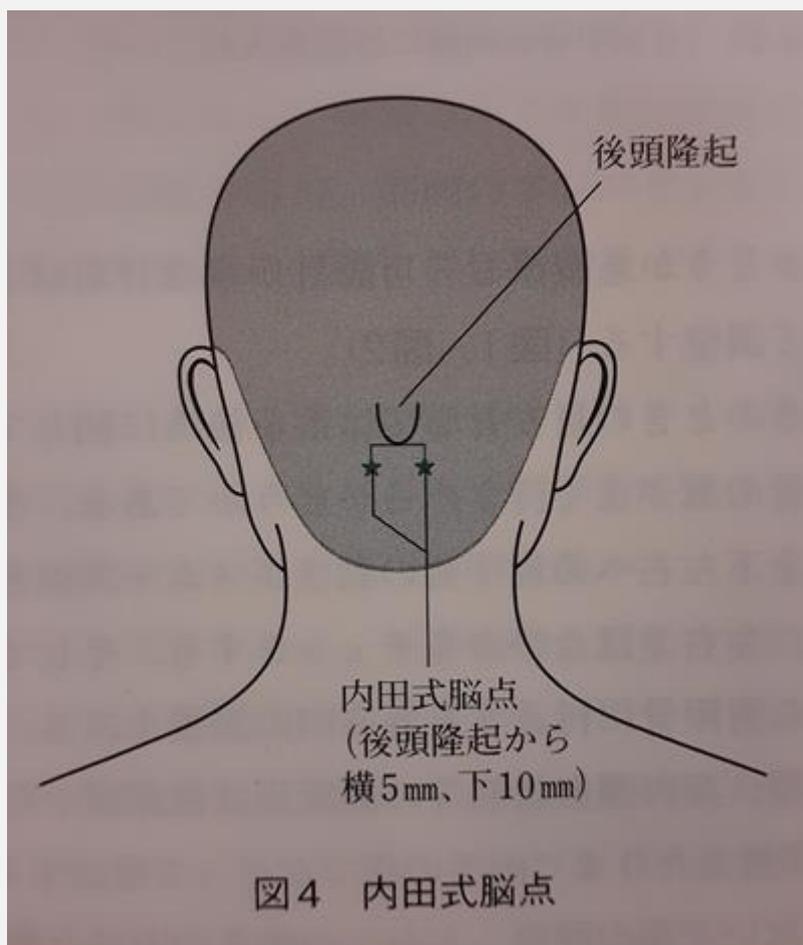
何も知らないのに、あれこれ考えても、むだ。
教えてもらって、そのあとに、あれこれかんがえよう。

【晩学】

ばんざいろうそでひこ
万歳楼袖彦著『灸治書』(九州大学図書館蔵)

「若きときの学問は、煙草(煙)のけふりとなれる人多し。晩学ならでは身に染ぬものなり。昔より晩学して名誉となりし人、王羲之をはじめ、和漢あげて算かぞえがたし。今、世間の人多くは、諸術諸芸とも、口には其理屈を説ども、其学ぶ処は中途半なかばにて、俗にいう幽霊なり。幽霊は腰より下はなしといふ。何事も腰なく踏張ふんばりりなきを幽霊仲間といひ、常に格別の抜け出たる芸術もなく…」

じっくり勉強して、みっちり身に付けよう。



内田輝和「顔面麻痺の鍼治療法と肩甲骨矯正法」『医道の日本』797号（2010年2月号）

さて、本題

『鍼灸臨床の科学』（医歯薬出版、2000年）

川村廣定「硬結の臨床的意義－アンケート調査結果の解析－」

| |
|------------|
| 硬結の発現する組織 |
| 皮内 |
| 皮下 |
| 筋膜 |
| 筋内 |
| その他 |
| 硬結＋？ |
| 皮膚温（高い・低い） |
| 乾・湿 |
| 凸・凹 |
| 滑・粗 |
| 感覚の敏・鈍 |

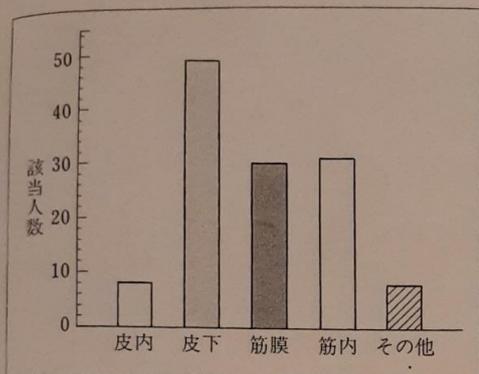


図4 硬結の発現する組織

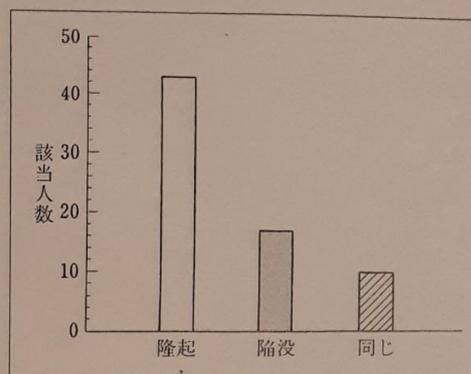


図7 硬結の表面皮膚の凹凸

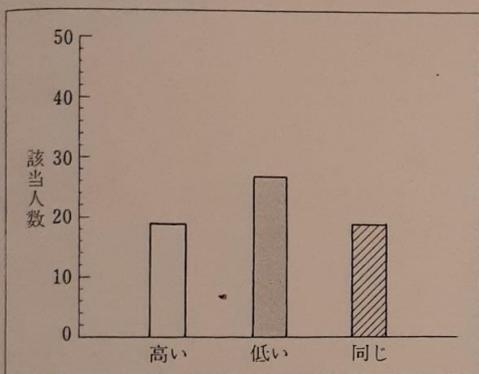


図5 硬結表面の皮膚温

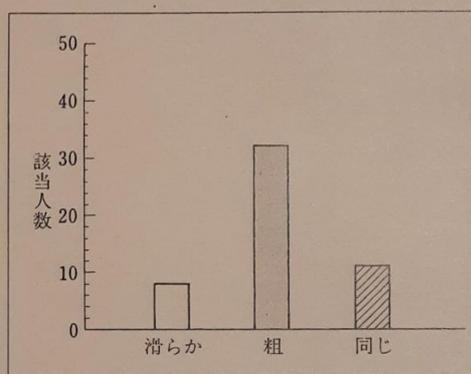


図8 硬結の表面皮膚の滑粗

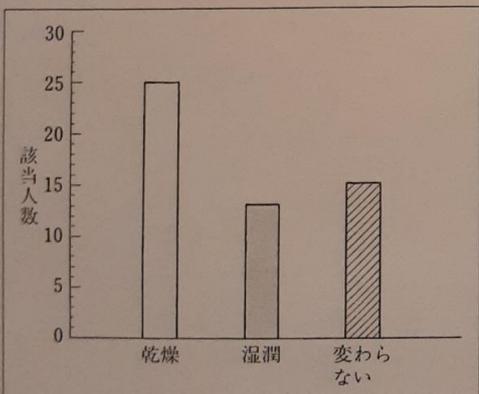


図6 硬結の表面皮膚の湿潤

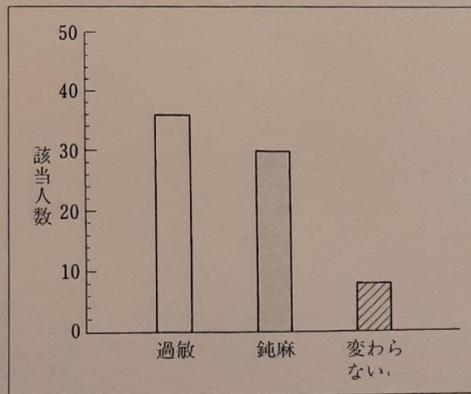


図9 硬結の表面皮膚の感覚

本日の目次

『黄帝内経』の「ツボ反応」

【0 愈・輸・腧】

【1 愈】

【2 輸】

【3 腧】

【4 穴・絡・節】

【5 寒・熱】

【6 陷下】

【7 拍動】

【8 ツボを診る】

【9 まとめ】

【〇 愈・輸・膺】

1) 一般的には「ユ」と発音するが、ツボをあらわすときは、いずれも「シュ」と発音する。

2) 3つの漢字は異なるので、使い方も区別したほうがよい。

①『膺穴学』（上海科学技術出版社、1984年）では使い分けている。

- ・膺穴（ツボの総称）
- ・五膺穴
- ・輸土穴・輸木穴
- ・背部愈穴

②『経絡経穴概論』（医道の日本社、2010年）は、すべて「愈」を使っている。

- ・五愈穴
- ・背部愈穴
- ・愈土穴

3) つぼ（愈・輸・膺）を刺激すると、病気が治るので、愈（いえる）・癒（いえる）とう漢字が生まれた。

【1 愈】

1、『説文』：木の中をくりぬいて舟をつくる。→えぐり取る（→【2 輸】に通じる）

2、しかり・そのとおり（許諾や同意を表す）→患者さんが「そこだ」と答える

2、患者さんが「そこだ」と答える（呼応する）

- ①ツボは、患者さんが決める
- ②ツボは、患者さんと治療者が決める

① ツボは患者さんが決める

「愈」（そこだ）は、「阿是」と同じ意味。

「阿」は、患者が「ああ」（応答の声）と言う。

「是」は、患者が「そこ」（正しいとみとめる）と言う。

唐・孫思邈の『千金方』第 29

「吳蜀多行灸法，有阿是之法，言人有病痛，即令捏其上，若裏当其処，不問孔穴，即得。便快成痛処。即云阿是，灸刺皆驗，故曰阿是穴也」とある。

（吳蜀、多く灸法を行う。阿是の法有り。言は、人に病痛有らば、即ち其の上を捏しめ、若し裏に其の処に当たれば、孔穴を問わずして、即ち得る。便快成痛の処を得れば、即ち阿是と云う。灸刺みな驗あり。故に阿是穴と曰うなり。）

中国の南方地域（吳・蜀）は、灸法が盛んに行われている。その中に阿是穴法がある。阿是の意味は、患者に痛み・痛みがあれば、その部分を揉捏し、もし深部で悪い処にぴったり当たれば、経穴の位置にかかわらずに、ツボが見つかる。喜按（快）か拒按（痛）の箇所が見つかれば、病者は「阿是」という。施灸・鍼刺どちらも効果がある。だから、このツボを阿是穴という。

【痛】

『靈樞』経筋篇

「以痛為輸」

（痛を以て輸と為す。）

治療者が押さえると、患者さんが「痛い」と言うところを、ツボとみなす。

「輸」は当て字で、「愈」が本字。

②ツボは、患者さんと治療者で決める

『素問』骨空論篇

「大風汗出、灸諵諵、諵諵在背下、俠脊傍三寸所、厭之令病者呼諵諵、諵諵**応**手」

(大風にて汗出せば、諵諵に灸せよ。諵諵は背下に在り、脊をせき挟むはさ傍かたわら三寸所、之をお厭せば、病者をして諵諵と呼ばしめ、諵諵して手に応ず。)

感冒で発汗しているならば、諵諵穴に施灸せよ。諵諵穴は、肩背部の下方にあり、脊中から3寸外方のあたり。そこを圧（壓）せば病者が「諵諵」といい、「諵諵」の声のびひきが手に伝わる。

「諵」は「ああ」と応答する声。「諵」は「ああ」と悲痛の声。

(患者)「ああ」と答える＋(治療者)ひびきが手に伝わる。

『靈枢』背腧篇

「按其処、**応**在中而痛解、乃其腧也」

(其の処をお按さえ、応、中に在り、而して痛み解くるは、乃ち其の腧なり。)

その処を押さえてみて、手ごたえが奥のほうにあって、さらに痛みが楽になる、その処がツボである。

「腧」は当て字で、「愈」が本字。

(治療者)手ごたえがある。(患者)痛みが楽になる。

【応】

下の3用例からすると、応は、**伝わること**。

向こうから情報がきて、こちらが受け取ること。

『素問』平人氣象論

「胃之大絡、名曰虚里、貫鬲絡肺、出於左乳下、其動**応**衣」

(胃の大絡、名づけて虚里と曰う。鬲を貫く。肺を絡う。左乳下に出て、其の動、衣に**応**)

ず。)

胃の大絡を、虚里（心尖拍動）という。横隔膜を貫く（短気・吐血の症となる）。肺を絡う（少気・胸痛の症となる）。拍動は左乳下に現れる。心尖拍動が強くなれば、衣服に伝わる。

『千金方』

「人迎、一名天五会、在頸、大脈動^い手、」

（人迎、一に天五会と名づく。頸に在り。大脈の動、手に^い伝^ず。）

人迎は、天五会ともいう。前頸部に在る。動脈の拍動が手に伝わる。

『靈枢』経筋篇

「手太陽之筋、起于小指之上、結于腕、上循臂内廉、結于肘内鋭骨之後、彈之^い伝^ず小指之上、」

（手の太陽の筋、小指の上に起こり、腕に結ぼれ、上りて臂内廉を循り、肘内鋭骨の後ろに結ぶ。之を弾けば小指の上に^い伝^ず。）

手太陽の経筋は、小指が起点で、腕関節にむすぼれ、上行して前腕内側をめぐり、内側上顆に結ぼれる。ここ（尺骨神経溝）を弾くと、小指に伝わる。

【触診には2種類あるようだ・・・】

| |
|-------------------------------|
| 向こうから情報がくる（伝わる）、それを感じ取る・受け止める |
| こちらから情報をあつめにいく |

| | |
|----|------------------------|
| 触診 | 応：伝わってくるものを感じ取ること（手応え） |
| | 探：探そうとすること（圧痛・硬結） |

【阿是穴：参考資料】

1、安井昌玄『鍼灸要歌集』（1695刊）

「阿是の穴は、三百六十所の外、痛むところを推て、鍼灸を行う。是れ天応の穴とも、また散鍼とも云なり」

阿是穴は、正式な経穴以外で、痛み痛む箇所を推してみても、鍼灸を行うツボ。天応穴ともいう。鍼法でいえば、散鍼法ともいう。

2、岡本一抱『鍼灸阿是要穴』（1703刊）

「其の阿是と言うは、若し何の処にても、病痛あることを覚ば、即ちその苦む処の体上を捏推しめて、若し裏その病処に適當せば、何の経、何の愈穴たるの分なく、只其の推て快く応へる処を以て、阿是与号て、即ち灸し、即ち鍼するに、皆なよく験あることを致す也。故に此れを名けて阿是与云也。蓋し身体の中いづこにても阿ねく推て是処を以て灸刺するが故に、阿是与云者也。按ずるに阿是は本朝に所謂をしやき也。」

（後半部分）これを名付けて阿是というが、身体のどこでも、あまねく（阿）推して、良い（是）と思われる箇所に施灸・鍼刺するのが阿是法というものである。考えるに、阿是法は、日本の「をしやき」（押し灼き・押し灸）に相当する。

3 小阪元祐『経穴纂要』（1810刊）

「阿是之名、出於唐代之代、漢書東方朔伝、師古註曰、今人痛甚則称阿云云、師古唐人、蓋當時有此声、阿是乃按而痛甚之处為是之意也」

（阿是の名は、唐代之代に出づ。『漢書』東方朔伝の師古註に曰く「今人、痛み甚しきときは則阿と称す云云」と。師古は唐人。蓋し当時、此声有り。阿是は、乃ち按じて痛み甚しきの処を、是と為すの意なり。）

「阿是」という名称は、唐代に出現した。それは『漢書』東方朔の顔師古の注に「今人は痛み甚しきを阿という」とある。顔師古は唐の人。おもうに当時「阿」という言い方が有ったらしい。「阿是」とは、押さえたら甚だしく痛む（阿）処、そこを適正なツボと認める（是）、という意味である。

【1 愈のまとめ】

1、「愈」は、揉捏すると患者が「そこだ」「ああ」と答える箇所。

- ①患者がツボを決める
- ②治療者と患者がツボを決める

2、「愈」は、「諛諛」、「阿是」にも通じ、『内経』の時代だけでなく、唐代、江戸時代にも通じ、古今を問わないという意味で、「愈」の治療は、原初的で普遍的な治療法といえる。

3、「愈」の治療は、鍼法では「散鍼」といわれ、灸法では「押し灼き」といわれた。現代的には、圧痛点療法ということができる。

【2輸の意味】

| | | |
|----------|----|-------------|
| 車で物を移し運ぶ | 輸出 | ① 体内から体外へ移す |
| | 輸入 | ② 体外から体内へ移す |
| | 輸送 | ③ 体内で移す |

① 体内から体外へ移す

→【1愈】(木の中をくりぬいて舟をつくる)と同じ。えぐり取る(とりだす)。

→医学的には、「写」(取り除く)、「出」(取り出す)・「泄」(もらす)・「除」(のぞく)が替わりに用いられる。

『靈枢』刺節眞邪篇

「凡刺癰邪…取之其輸、寫之」

(凡そ癰邪を刺すは、…之を其の輸に取り、之を写く。)

できもの(癰疽)の鍼治療は、…患部(輸)に鍼を刺して、膿血を取り除く。

*「輸」が患部であるのは、後述。

『靈枢』禁服篇

「夫約方者、猶約囊也、囊滿而弗約、則輸泄」

(夫れ方を約するは、なお囊を約するがごときなり。囊満ちて約せざれば、輸泄する。)

技術(方)を引き締める(約)のは、袋の口を縛るようなものである。袋が一杯なのに、口を縛らなければ、中身が漏れ出るからである。

*「輸泄」は、輸(外へ出す)・泄(外に出る)、どちらも中から外へという意味。

『靈枢』九鍼十二原篇

「滿則泄之、宛陳則除之」

(満なれば、すなわち之を泄らす。宛陳なれば、すなわち之を除く。)

充満していれば泄らす。鬱血していれば、血を取り除く。

2. 体外から体内へ移す(注入する・送り込む)

→飲食物の栄養補給、呼吸による酸素補給が「輸入」に該当する。

→漢和辞典の用例では「輸血」をあげる。

→医学的には、「入」が替わりに使われる。

『靈枢』壽夭剛柔篇

「以熨寒痺所刺之處。令熱入至于病所」

(以て寒痺の刺す所の處を熨して、熱をして病所に入りて至らしむ。)

寒痺の刺鍼予定の部位を、熨法（温罨法）をして熱気を入れて病所に到達させておく。

*寒痺には、毫鍼を置鍼するのだが、その前に、その部分を十分に暖めておくべきことを言っている。

3. 体内での移動

中と外の関係ではなく、中だけの移動も「輸」を用いる。

この「輸」が、気を移す、気を送るという意味で、背俞穴・本腧穴と使われている。背俞の俞・本腧の腧は当て字であり、「輸」が本字である。

背俞穴・本腧穴は、局所治療ではなく、遠隔治療であるから、進化した治療ということができる。局所の力づくの治療から、遠隔の戦略的な治療へ進化した。

『素問』経脈別論篇

「肺朝百脈、輸精於皮毛」

(肺は百脈に朝し、精を皮毛に輸る。)

肺は百脈に謁見したり（朝）（寸口脈のことを言っている）、肺の精を皮毛に送ったりする。

『素問』五藏別論篇

「夫胃大腸小腸三焦膀胱、…故寫而不藏、…此不能久留、輸寫者也」

(夫れ胃・大腸・小腸・三焦・膀胱は、…故に写りて蔵さず。…此れ久しく留むることあたわず。輸写するものなり。)

胃・大腸・小腸・三焦・膀胱の五府は、内容物は移動するだけで貯蔵することはない。…長く留めることができないのである。移動させるものである。

*「輸写」は、ここでは「輸」（移す）と「写」（移す）である。

『靈枢』脹論

「咽喉小腸者。伝送也」

(咽喉・小腸は、伝送するものなり。)

喉と、小腸は、ただ伝え送るもので、ためこむものでない。

【背俞穴・本腧穴】

「輸」の移すの意味を使い、「氣を移すツボ」（背俞穴・本腧穴）が考えられた。「氣を移す」とは、シーソー現象を利用してバランスを取ることである。

『素問』離合眞邪論篇

「経言、氣之盛衰、左右傾移、以上調下、以左調右、有餘不足、補寫於榮輸」

（経に言う、氣の盛衰、左右の傾移、上を以て下を調え、左を以て右を調え、有餘・不足は、榮輸に補寫せよ、と。）

古経に、氣の盛衰や、左右の傾きや、上下や左右のバランスを整え、有餘や不足があれば、五腧穴に補瀉すべきである、と言っている。

| | | |
|------|-------|---------|
| 氣之盛衰 | 以上調下 | 上実下虚の治療 |
| 左右傾移 | 以左調右 | 繆刺治療 |
| 有餘不足 | 補寫於榮輸 | 蔵府の虚実治療 |

『素問』調経論篇

「夫陰与陽、皆有愈会、陽注於陰、陰滿之外」

（夫れ陰と陽と、みな愈会有り。陽は陰に注ぎ、陰は外に満つ。）

陰と陽は、ひびきあい（愈会）がある。陽は陰に注ぎ、陰は陽（外）に充滿する。

『素問』著至教論篇

「此皆陰陽表裏、上下雌雄、相輸応也」

（これみな陰陽表裏、上下雌雄、相い輸応するなり。）

陰陽や表裏、上下や雌雄は、それぞれひびきあう（輸応）ものである。

| | |
|---------------------|-------|
| 「愈会」：愈（答え）・会（めぐりあう） | ひびきあう |
| 「輸応」：愈（答え）・応（伝わる） | |

【背俞穴・本腧穴の運用】

陰（蔵府）→陽（体表）：蔵府の氣は体表とひびきあう

陽（体表）→陰（蔵府）：体表の氣は蔵府とひびきあう

局所

遠隔

病

實 虛

(浮)

(補)



平



体内

体表

{ 本腧穴
背腧穴

病

實 虛

(補)

平



【ひびきあうとは】

シーソーと同じで、

陰が下がれば、陽があがる。陽を下げれば、陰が上がる。

陰が上がれば、陽は下がる。陽を上げれば、陰が下がる。

⇒体表の局所は、直接治療できる。

⇒蔵府に対しては鍼灸では局所治療ができないので、遠隔治療が創出された。

⇒陰陽思想の臨床的応用であるが、そこに「輸」がかかっていた。

⇒輸入・輸出をしないで、体内だけの「移動」で平均化すること。

【3 脛】

中医学的にはツボの総称を「脛穴」というが、『内経』では、「脛」を局所という意味で使っている。この「脛」は、意味的には「愈」と同じかもしれない。

『靈枢』刺節眞邪篇

「凡刺癰邪…取之其輸、寫之」

(凡そ癰邪を刺すは、…之を其の輸に取り、之を写く。)

できもの（癰疽）の鍼治療は、…患部に鍼を刺して、膿血を取り除く。

* 「輸」は当て字で、「脛」が本字。

『靈枢』厥病篇

「頭痛、不可取于脛者、有所擊墮、惡血在于内、若肉傷痛未已。可則刺、不可遠取也。」

(頭痛、脛を取るべからざるは、擊墮する所有りて、惡血、内に在り、若しくは肉、傷れて痛み已えず。可なれば刺し、不可なれば遠取するなり。)

頭痛で、患部（脛）を治療していけないのは、高いところから落ち、打撲して内出血があり、または肉（筋肉・筋肉）が損傷し、痛みが治りきっていない場合である。しかし、治療してよい（可）と判断できたら治療してよい（刺）。まだ治療してはならない（不可）と判断したら、患部から遠いところで治療するのがよい。

* 頭痛で、頭部の打撲か、頭部の裂傷がなおりきっていないのであれば、患部の治療は慎重にしなければならないことをいう。

『靈枢』厥病篇

「心痛不可刺者、中有盛聚、不可取于脛」

(心痛、刺すべからざるものは、中に盛聚有らば、脛を取るべからず。)

心痛で、鍼刺していけないのは、深層に実的なかたまり（盛聚）があると予想したとき、患部（脛）を治療してはならないという。この場合の患部とは、膻中穴～心窩と思われる。

【愈・輸・腧】のまとめ

1 愈は、局所である。

2 愈は、局所の、患者さんの反応＋治療者の手応え

3 輸で、意味は広がった

4 輸は、局所から取り除く

5 輸は、局所に入れる

6 輸から、遠隔治療（気を移す）が考えられた

7 腧は、局所の意味がある。

中医学のように、ツボの総称に用いることもある。

【4 穴・絡・節】

「三百六十五」は、

- ① 365 という数字を意味する
- ② 全身という意味で、かならずしも 365 有るわけではない

「**気穴**三百六十五」は、ほぼ経穴を指す。ということは、「三百六十五」という表現は、経穴学が確立されてからのもの。

とすると、「**俞**」「**輸**」「**腧**」は経穴学確立以前と思われる。

『素問』鍼解篇

人九竅三百六十五**絡**

九竅三百六十五

『素問』氣穴論篇

気穴三百六十五

孫絡三百六十五**穴**会、亦以応一歳、

谿谷三百六十五**穴**会、亦応一歳、

亦三百六十五**脈**、

『素問』氣府論篇

凡三百六十五**穴**也、

『素問』調經論篇

三百六十五**節**、

夫十二経脈者、皆絡三百六十五**節**、

『素問』徵四失論篇

夫経脈十二、**絡脈**三百六十五、

『靈樞』九針十二原篇

節之交三百六十五**会**

| | |
|------|----------------------|
| 気穴・穴 | 気を調整するツボ＝経穴 |
| 絡・孫絡 | 絡脈・細絡・孫絡＝刺絡対象の静脈 |
| 節 | 外邪を取り締まる処（腠理が開いている所） |
| 溪谷 | 外邪が留まりやすい所 |

【気穴・穴】

穴：土中の室（むろ）。『素問』 氣府論に「穴空」とあり、これが「土中の室」を表現しているものと思われる。ただし1箇所しか使われていない。

孔：開いている孔（あな）。たとえば鼻孔、尿道孔など。

空：『素問』 骨空論に、「骨のあな」という意味で「空」が使われている。たとえば仙骨孔、オトガイ孔、眼窩下孔など。

こうしてみると、「穴」を単純に「^{むろ}室状の空間」と解釈するのは、早計なのかもしれない。『素問』 氣穴論には、「蔵愈五十穴、府愈七十二穴、熱愈五十九穴」とあり、五蔵を治療するツボは50箇所、六府を治療するツボは72箇所、体熱を洩らすツボは59箇所ある、という。これらのツボが「^{むろ}室状の空間」とは考えにくい。してみると、「穴」はツボ量詞と思われる。（1冊、1個、1本の冊・個・本）。

【絡脈】

悪血を取り除く目標。【2輸】（除く）に相当する。

具体的には、皮静脈（とその分枝）であり、全身に存在するので「三百六十五」というが、よく見られる部分は限られている。

『甲乙経』

「瘰脈、在耳本後、雞足青絡脈、刺出血如豆汁」

（瘰脈、耳本の後に在り、雞足のごとき青き絡脈、刺して血を出だすこと豆汁の如し。）

「顛息、在耳後間、青絡脈」

（顛息、耳後の間に在り、青の絡脈なり。）

【節】

「節」の意味は、取り締まる。医学的には、外邪が入らないように取り締まること・ところ。取り締まりの機能が衰えたところは節穴（板などの節が抜け落ちたあとの穴）を形成し、開いている穴を閉じる治療をする。

節約（束縛して自由にさせない） 礼節（倫理上守るべきみさお）

具体的は、開いている腠理（汗腺）を指す。腠理は全身にあるので「三百六十五」というが、開いている腠理は肩背部によく見られる。

『靈枢』九針十二原篇

「五藏有疾、當取之十二原、十二原者、五藏之所以稟三百六十五節氣味也」

（五蔵に疾有らば、当にこれを十二原に取れ。十二原は、五蔵の三百六十五節の気味稟くる所以なり。）

五蔵に疾があれば、十二原穴を治療する。十二原穴は、五蔵のツボで、三六五節と同じ意味を持っている。

* 全身に節穴（三百六十五節）があれば外邪が入ってくる。原穴が節穴を形成していれば、外邪は五蔵に直達する。

【谿谷】

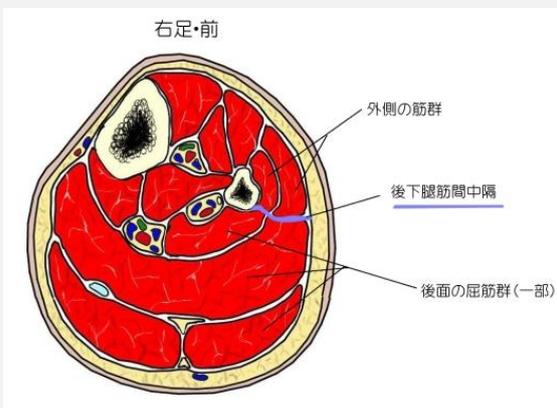
筋間（溝）の大きいのを谷・小さいのを谿という。邪気がたまりやすかったり、寒邪がたまりやすいところである。経穴名でいえば、合谷・陷谷・陽谿・太溪・侠谿などである。

『素問』氣穴論

「肉之大会為谷、肉之小会為谿」

（肉の大会を谷と為し、肉の小会を谿と為す。）

筋肉と筋肉の大きな溝を谷といい、小さな溝を谿という。



「邪溢気壅、脈熱肉敗、榮衛不行、必将為膿」

(邪溢れ、気壅^{うき}がり、脈熱し、肉敗れ、榮衛行らざれば、必ず將に膿を為さんとす。)

邪気が充溢し、気が壅滞し、血脈が熱気を帯び、筋肉が損なわれ、営気・衛気が流れなければ、きっと膿を形成するはずである。

「大寒留於谿谷也」

(大寒は、谿谷に留むるなり。)

寒邪は、谿や谷に滞留する。

【5熱のツボ・冷えのツボ】

1 『靈枢』 経脈篇

「熱則疾之、寒則留之」

(熱すればこれに疾くし、寒なればこれに留む。)

熱感があるところは素早く鍼を刺し、冷えているところは鍼を留置する。

| | | |
|---------|-------------|--------------|
| 熱しているツボ | 外に出す(輸出) | 速刺速抜法で、熱を洩らす |
| 冷えているツボ | 周辺から集める(輸入) | 留置鍼法を行う |

2 『素問』 鍼解篇

「刺実須其虚者、留鍼陰氣隆至、乃去鍼也、」

(実を刺すとき其の虚を須つとは、鍼を留め、陰氣、隆んに至れば、乃ち鍼を去るなり。)

実を刺すときに虚するのを待つというのは、鍼を留置し、陰氣がよく集まってくれば、鍼を抜くことである。

「刺虚須其实者、陽氣隆至、鍼下熱、乃去鍼也、」

(虚を刺すとき其の実するを須つとは、陽氣、隆んに至り、鍼下熱すれば、乃ち鍼を去るなり。)

虚を刺すときに実してくるのを待つとは、陽氣が盛んに集まってきて鍼先が熱くなれば、鍼を抜くのである。

| | | |
|--------|----------------|-------|
| 実のツボ=熱 | 陰氣が周辺から集まる(輸出) | (鍼下寒) |
| 虚のツボ=寒 | 陽氣が周辺から集まる(輸入) | 鍼下熱 |

| | |
|-----------|-------------------------|
| 実が気が入っている | 気が実していれば熱している |
| | 実に鍼を入れる場合、左手で鍼孔(空)を閉じない |
| 虚が気が出ている | 気が虚していれば冷えている |
| | 虚に鍼を入れる場合、左手で鍼空を閉じる |

3 『素問』 刺志論篇

「実者気入也、虚者気出也、気実者熱也、気虚者寒也、入実者、左手開鍼空也、入虚者、

左手閉鍼空也、」

| | |
|-------|------------|
| 実者気入也 | 気実者熱也 |
| | 入実者、左手開鍼空也 |
| 虚者気出也 | 気虚者寒也 |
| | 入虚者、左手閉鍼空也 |

| | |
|-------------------------|---------------------------------------|
| 実 ^じ は気が入っている | 気が実 ^じ していれば熱している |
| | 実 ^じ に鍼を入れる場合、左手で鍼孔（空）を閉じない |
| 虚 ^そ は気が出ている | 気が虚 ^そ していれば冷えている |
| | 虚 ^そ に鍼を入れる場合、左手で鍼空を閉じる |

「実者気入也」「気実者熱也」「入実者、左手開鍼空也」

（実とは気入るなり）（気実^じは熱なり）（実^じを入^ますは左手もて鍼空を開くなり）

実とは気が集まっている（入）こと。気が実^じしていれば熱くなる。実^じを刺すときは、左手は鍼孔を閉じない（気を洩らすようにする）。

「虚者気出也」「気虚者寒也」「入虚者、左手閉鍼空也」

（虚とは気出るなり）（気虚^そは寒なり）（虚^そを入^ますは左手もて鍼空を閉ずるなり）

虚とは気が散っている（出）いること。気が虚^そすれば冷たくなる。虚^そを刺すときは、左手で鍼孔を閉じる（気を洩らさないようにする）。

| | | | |
|---|---|-------------|--------------------|
| 実 | 熱 | 外へ輸出 | 気を外に洩らすために鍼孔を閉じない |
| 虚 | 寒 | 周辺から集める（輸入） | 気を外に洩らさないために鍼孔を閉じる |

【6 陷下のツボ】

『素問』骨空論

「視背俞、陷者灸之」

(背俞を見て、陷するものは之を灸す。)

背俞穴を観察して、陷下しているならば施灸する。

『靈樞』禁服篇

「陷下者、脈血結于中、中有著血、血寒、故宜灸之、」

(陷下は、脈血、中に結ぼれ、中に著血ありて、血寒ゆ。故に宜しくこれに灸すべし。)

陷下とは、経脈の血が結滞している状態。留着した血があるため、血が寒えている。寒えているから、施灸が良いのである。

【陷者中】

(陷なる者の中)とは、陷下の中心点。ということは、陷下は、点状ではなく、面状である。

『靈樞』本輸篇の五俞穴の陷下

〔陰経〕

太淵、魚後一寸 陷者中也、

曲沢、肘内廉下 陷者之中也、屈而得之、

大衝、行間上二寸、 陷者之中也、

中封、内踝之前一寸半、 陷者之中、使逆則宛、使和則通、搖足而得之、

大都、本節之後下、 陷者之中也、

商丘、内踝之下、 陷者之中也、

陰之陵泉、輔骨之下、 陷者之中也、伸而得之、

大谿、内踝之後、跟骨之上、 陷中者也、

〔陽経〕

束骨、本節之後、 陷者中也、

臨泣、上行一寸半、 陷者中也、

丘墟、外踝之前下、 陷者中也、

陽之陵泉、在膝外、 陷者中也、伸而得之、

陷谷者、上中指内間、上行二寸、陷者中也、
 衝陽、足跗上五寸、陷者中也、搖足而得之、
 解谿、上衝陽一寸半、陷者中也、
 中渚、本節之後、陷中者也、
 陽池、在腕上、陷者之中也、
 支溝、上腕三寸、兩骨之間、陷者中也、
 天井、在肘外大骨之上、陷者中也、
 前谷、在手外廉本節前、陷者中也、
 陽谷、在銳骨之下、陷者中也、
 陽谿、在兩筋間、陷者中也、
 曲池、在肘外輔骨、陷者中、屈臂而得之、

『甲乙經』（陷下が^が発現しやすい部位）

①胸部任脈

中庭、在臚中下一寸六分、陷者中、仰而取之、
 臚中、在玉堂下一寸六分直兩乳間、陷者中、仰而取之、
 玉堂、一名玉英、在紫宮下一寸六分、陷者中、仰頭取之、
 紫宮、在華蓋下一寸六分、陷者中、仰而取之、
 華蓋、在璇璣下一寸六分、陷者中、仰頭取之、
 璇璣、在天突下一寸中央、陷者中、仰頭取之、

②頭部督脈

「可容豆」（豆を容る^{ばかり}可）

「骨間」（縫合を目印とする）

上星、在顛上、直鼻中央、入髮際一寸、陷者中、可容豆、
 顛会、在上星後一寸、骨間、陷者中、
 前頂、在顛会后一寸五分、骨間、陷者中、
 百会、在前頂後一寸五分、頂中央旋毛中、陷可容指、

③「分肉」（筋肉と筋肉の割れ目を目印とする）

中瀆、在髀外膝上五寸分肉間陷中、
 承山、在兌臑腸下分肉間陷中、

【7 拍動のツボ】

動脈拍動部は、ツボの一つである。

動脈拍動部と陥下の両方を兼ねることもある。★印

『明堂経』（小曾戸丈夫氏復元）

尺沢者、在肘中約上動脈、

勞宮者、在掌中央動脈中

★少海者、在肘内廉節後陷者中、動脈応手、

★行間者、在足大指間動脈陷者中、

★太衝者、在足大指本節後二寸、或曰一寸五分陷者中、

* 『素問』刺腰痛論の王冰注「在足大指本節後内間二寸陷者中、動脈応手」

★太谿者在足内踝後跟骨上動脈陷者中、

大鍾、在足跟後衝中、

* 『素問』刺腰痛論の王冰注「在足跟後衝中、動脈応手」

★復溜者、在足内踝上二寸陷者中、

* 『素問』刺腰痛論の王冰注「在内踝上二寸動脈」

【8 ツボを診る】

1 『靈枢』 経水篇

「審切循捫按、視其寒温盛衰而調之、是謂因適而為之眞也」

(切循捫按を審かにし、其の寒温盛衰を視て、而して之を調う。是れ「適に因りて之が眞を為す」と謂うなり。)

撫でたり(切循)、押してみたり(捫按)を、精細に行い、さらに冷えと熱(寒温)、実と虚(盛衰)をよく観察して、そのあとに調整するのである。これを「適にもとづき、本当の治療をする」という。

| | | |
|--------|----------------|-----------|
| 切循捫按して | 寒・温、盛・衰のツボを見つけ | 丁度よい治療をする |
|--------|----------------|-----------|

【適】

『莊子』 達生篇

「忘足、履之適也。忘要、帶之適也」

(足を忘るるは履の適なり。要を忘るるは、帯の適なり)

足を忘れているのは履がちょうどよいから。腰をわすれているのは帯がちょうどよいから。

2 『靈枢』 周痺篇

「刺痺者、必先切循其下之六経、視其虚実、及大絡之血、結而不通、及虚而脈陷空者而調之、熨而通之、其癰堅転、引而行之」

(痺を刺すは、必ず先ず其の下の六経を切循し、其の虚実、及び大絡の血、結して通ぜざる、及び虚して脈の陷空せる者を視て之を調え、熨して之を通ず。其の癰・堅・転なるは、引きて之を行らす。)

痺証の治療は、足の六経を撫でさすり(切循)、虚実の反応や、絡脈が結滞しているか、あるいは虚して凹んでいるをよく観察して(視)、調整する。また温罨法(熨)をして気を流すのである。引き攣れて硬くなり(癰堅)、転筋しているのは(転)、導引して気をめぐらす。

| | |
|-----------|---------------------------------|
| 足の六経を切循して | 虚実、絡脈の結滞、引き攣れて硬くなり、転筋しているのを見つける |
|-----------|---------------------------------|

3 『素問』 三部九候論篇

「必審問其所始病、與今之所方病、而後各切循其脈、視其經絡浮沈、以上下逆從循之」

(必ず、其の始めて病む所と、今の方に病む所とを 審^{つまびら}かに問い、而^{しか}る後に各おの其の脈を切循し、其の經絡の浮沈を視て、上下・逆從を以て之を循^{めぐ}らす。)

まず、先に病んだところ、そして今、病んでいるところを、詳しく問診する。その後、脈診（切）と切經（循）をし、浮いている絡脈を観察し、その上で、上下や逆從（逆順）を考えて調整する。

| | |
|----|----------|
| 問診 | 既往歴 |
| | 現症 |
| 触診 | 經脈を切・循する |
| | 經絡の浮沈を視る |

【9 まとめ】

【1 愈】

局所の反応点

【2 輸】

局所：出す（対外へ排除する）（周囲へ散らす）

局所：入れる（対外から補給する）（周囲から集める）

遠隔：背愈穴・本腧穴

【3 腧】

局所を意味する

【4 穴・絡・節】

気穴：経穴

絡：刺絡対象の静脈

節：腠理が開いている箇所

【5 寒・熱】

寒：冷えているところ

熱：熱しているところ

【6 陷下】

凹んでいるところ

【7 拍動】

動脈拍動部

【8 ツボを診る】

1 触診：

皮膚・経脈

切循・捫按

滑粗・腠理の開閉・硬結・

2 視診：絡脈・陷下・寒熱

【9まとめ】

以上のようなツボ反応を触診で見つけ、その集大成が経穴学である。

経穴学は、2つの学問から形成されている。

1 ツボを探す学問

2 ツボの位置・名称・主治症の学問

経穴学で「初心に帰る」ならば、「ツボを探す」を見直すことである。そのために、ツボを探す学問の樹立は、急務とおもわれる。